

Keats の物語詩と「夢」のテーマ

庄 子 信

(1)

Keats は未完の作品を含めると八つの物語詩を書いているが、それらはオードの美しい光のかげに幾分隠されている傾向がある。Pettet によれば、「オードの傑出性のためにわれわれは、叙情詩がキーツの創作活動のさほど重要ではない副産物にすぎず、又オードでさえ彼は、付随的な作品としか見なしていなかった」^① 事実を見過ごしがちである。しかし Keats にとって物語詩の創作は特別に重要な意味をもっていたのであり、それは Shakespeare 的な詩人になりたいという生涯の希望と、さらに劇作への野望とも結びついていたことが彼の書簡から明らかである。1819年11月17日付の書簡で彼は「物語詩を書くことは私を勇気づけて二三の美しい劇を書かせるようになると思います。…劇作は私が野望を感じる時の大きな対象なのです。」^② と言っている。

この同じ書簡で Keats は、自分の物語詩には「『聖夜アグネス祭前夜』の如き色彩を施して、その中に織物の模様のような具合に、人物や情緒 (sentiment) を鏤めたいと思っています。」と書いているが、この一節は、彼の物語詩の創作方法をよく示していると思われる。彼は最初の物語詩である長詩 *Endymion* を書きながら、「エンディミオンは私の想像力 (Imagination) 又特に創作力 (Invention) の能力をためすよい試練だ。これをたよりに私は一つの単純な状況から四千行を作り出し、しかも詩で充実させなければならないのだ。」(L. p.52) と言っているのを合せて考えると、彼の物語詩創作の手法は、人物の行為とそれにつれての plot の発展を重視するのではなく、人物は情緒と同じ比重で織物の模様として詩の中に鏤められ、一つの単純な状況から Imagination の自由な飛翔にまかされて詩が組立てられて行くことになる。これは当然物語を dramatic なものでなく、static なもの、又 objective に扱うのではなく subjective な扱い方である。これは又 Shakespeare の劇作品の世界とは対蹠的な世界となることを意味するであろう。W. P. Ker は *Form and Style in Poetry* のなかで「物語詩は詩という制約のために対話 (dialogue) やドラマの要素を効果的に用いることはできないのだから、ストーリーの点で散文と同じ効果をねらえば必ず失敗するものであり、シェイクスピアですら wit や pathos や悲劇的場面では、しばしば散文を用いている。だから物語詩が最も成功するのは、対話やドラマ的效果を求めず、pure narrative をもって詩行の音調の美しさから、そこに詩人の心と感情が強く感じられるときである。」^③ という意味のことをのべている。この点から見れば Keats の物語詩創作の態度は Ker の観点と一致しているといえる。一般的に彼の物語詩

のなかで強い興味と力を持つ詩句は、M. Allot も指摘するように、plot とか人物による束縛が最も少く、彼の Imagination が自由にさまようときであると言えよう^④。

しかしながら Keats は自分の物語詩に対し、それらが現実からあまりにも遊離しているという理由で、はげしい不満を感じていたのである。1819年の9月には友人あてに

Pick out some lines from Hyperion and put a mark X to the false beauty proceeding from art, and one ll to the true voice of feeling. (L. pp.384~5)

と書き、同じ日付の他の書簡では *Isabella* を余りにも感傷的であるとして次のように書く。

There is too much inexperience of life, and simplicity of knowledge in it....

Isabella is what I should call were I a reviewer 'A week-sided Poem'. (L. p.391)

人間の心に対する深い洞察、それを彼は Shakespeare 的な特質と考えたが、そのような内容が欠けているとして、彼の不満は *St. Agnes' Eve* にも及び (*Lamia* については There is no objection of this kind to *Lamia* (L. p.391) ; There is that sort of fire in it (L. p.402)) と言っている。この詩に対する dramatic な意図と効果を認めていたと思われる。) その後これまで書いた作品は全て出版するつもりはないと決心している、とのべている。(L. p.439)

Keats は1816年の暮までには *Sleep and Poetry* においてすでに the realm of Flora and Old Pan から the Agonies and Strife of human hearts をうたうことへ進展することを、詩人の使命としているのだが、*The Fall of Hyperion* にあらわれている dreamer への厳しい批難は、全て The giant agony of the world (the F. of H. l.157) を自己のものとしなない詩人への批難であり、ここに *Sleep and Poetry* からの帰結を見ることができる。このような現実主義的といえる意識から、性急に自分の物語詩を否定しようとするのだが、次の書簡の一節は、この矛盾した意識をよく示している。

「感覚的官能的な驚異は“調べよき詩”のなかでも最も人の心を惹くものなので、今まで私は努めて空想 (Fancy) の絆を解きはなち、空想の赴くがままに任せていた。しかしこの点で私と私の本質とは全く一致できない。私の本質から見れば感覚的驚異 (wonders) は驚異ではなく、私は普通の人間の間にいる方が落ち着きます。私はアリオストよりチャーサーの方が読みたいと思います。」(L. p.439)

Coleridge の Imagination 論とは異り Keats の場合 Fancy というときそれは Imagination と同一のものと考えてよい。Keats の Imagination は感覚的、感能的世界へ束縛から解放たれて自由に飛翔したいと希う一方、彼は現実的な「普通の男女」が躍動し苦悩する世界を創造することに心を惹かれている。それは又、物語詩の創作が、劇作への stepping-stone であると意識しつつも、「聖女アグネス祭前夜の色彩と情緒」に本能的な親近感を抱いているという、二つに分裂している創作衝動でもある。「この点で私と私の本質は一致できない。」(I and myself can't agree about this at all) という言葉は、^⑤このような矛盾を示しているのである。

(II)

Keats は Imagination の機能と性格について、究極的な実在, beauty と truth に到る「最も信ずべき船の帆であり, 舵である」(L. p.52)と考えていたばかりでなく Imagination 自体が Thorpe の言葉によれば generative force^⑦ であり究極的な実在と美を生み出すものでもあると信じていた。しばしば引用される「想像力が真実であることは疑う余地がない。たとえ以前から存在したものであろうとなかろうと, 想像力が美として促えたものは, 同時に真実なものであるに相違ない。」(L. p.67) という一節は, *Ode on a Grecian Urn* の一節とともに彼の考えをよく示している。彼は又, Milton の *Paradise Lost* の, Adam が Eve の創造を夢見て, 目ざめるやそれが真実であることを知るという一節を念頭において (*Paradise Lost* viii.460-90)

The Imagination may be compared to Adam's dream, he awoke and found it truth.
(L. p.67)

と書いているが, ここでは, 直接に「夢」が Imagination の機能をはたすと Keats が考えていたのを知ることができよう。

この夢のテーマは, 彼の物語詩のなかで一貫して執拗に繰り返されている。例えば *Endymion* においては, Endymion と Cynthia との夢の中での愛が, 彼を beauty-truth を追求する長い放浪の旅に出すことになるばかりでなく, 結末においても同様である。*The Eve of St. Agnes* では Madeline が Porphyro の夢からさめるとベッドの側に現実の彼を見い出すのも同じ状況^⑧である。

Endymion から最後の *The Fall of Hyperion* まで, 種々の素材をもとにし, 詩の形式また詩行の長短もさまざまに異っているが, いま述べたような極めて類似した感情的状況が繰り返し描かれ, ひとつのパターンと化した状況となっている。これらは全て, 陶酔的な魅惑された心の状態 (swoon, trance, sleep, enchantment) から「夢」を契機として, ある種の現実を認識するに到る状況である。

大ざっぱな分類であるが, この状況は二つに分けられよう。第一の場合は *La Belle Dame Sans Merci* に象徴的に示されている。登場する人物には, 陶酔の境地に達する恋人たちが選ばれる。一方が花や果物, 酒, 音楽, 又は芳香等のイメージに伴われて swoon 或は sleep の状態に入り次いで彼は完全な魅惑 enchantment に陥いる。この状態が続く間, 彼は感覚的官能的な悦楽に自分と自分を取り巻く現実の世界を忘れてはいるが, しかし彼は恐ろしい夢を見て突然覚醒し, 現実の自己意識, それは常に絶望的なものだが, へと投げ込まれてしまう。しばしば女性は魔性を帯びており, それが不幸をもたらす原因となる。恋人の魅惑状態からの目ざめは, 何らかの前兆が示されるのではなく, 突然悪夢から目ざめるとか, 激しい喉のかわきなどによる。その結果自分が嫌悪すべき姿になっているのを知り, 絶望し, 或は結果として死に到るものとして描かれる。もう一方の系列として, 第一の場合と殆んど同じ状況がくり返されるのだが, ただ *Endymion*, *The Eve of St. Agnes*のごとく結末として Happy End の形式をとっているものである。未完ではあるが, *Hyperion* もこのなかに含まれよう。しかしこの分類はあくまで便宜的なものであり(例えば *Endymion* の Glaucus と Circe の episode は両者に入り組んでいる) 結末だけか

ら判断することはできないので、ここでは両者を同一のものとして考察する。

(III)

この「夢」のテーマが典型的にあらわれているのは *La Belle Dame Sans Merci* である。オードとならんでこれは Keats の傑作であるが、この詩には彼のロマンティズムの一側面である *mediaeval revival* の極致を見ることができる。folk ballad の形式で書かれていることが、この詩に特殊な効果を与えているが、最初の三連は anonymous someone による騎士への問いかけとして非常に simple な構成であり、これが彼の物語詩にしばしば見られる談長さを救っている。騎士へ問いかけている者へ、読者は心理的に同化させられ騎士の物語に自然に耳を傾けるという効果が無理なく生じているためである。

イメージも ballad imagery の

Her hair was long, her foot was light
And her eyes were wild (ll. 15-6)

或いは with kisses four (l. 32) など生き生きした単純なイメージであり、ballad 手法の繰り返しと、各連の終りの一行を二歩格 (dimeter) と普通より短くしていることは、リズムの流れをせき止め、暗うつな音調を強めている。

内容は、一人の騎士が野辺で仙女姫に出会う。彼女は騎士を自分の洞穴にさそい、彼はそこで深い眠りにさそわれる。(このとき roots of relish sweet, honey wild, manna dew などに言及される) 騎士が恐ろしい夢を見て突然目ざめると、荒涼たる冬枯れの野辺にただひとりの自分を見出す、というのである。

And there she lulled me asleep,
And there I dreamd—Ah woe betide!
The latest dream I ever dreamt
On the cold hill side.

I saw pale kings, and princes too,
Pale warriors, death pale were they all;
They cried—“La Belle Dame sans Merci
Hath thee in thrall!”

I saw their starv'd lips in the gloam
With horrid warning gaped wide,
And I awoke, and found me here
On the cold hill side. (IX-XI)

fatal woman である仙女姫と、その愛のために破滅する騎士の形象化は、Keats の Imagination がとらえた真実の姿である。

この詩に一番近い類似関係をもつのは、*Endymion* のなかの Glaucus と Circe の

episode であろう。

Endymion は1817年4月に書き始め11月に終わっているから *La Belle Dame Sans Merci* より二年近く前に書かれたことになる。主人公の牧羊者 Endymion が夢に見た月の女神 Cynthia を恋し、目ざめとともに消えた Cynthia をたずねて、地底・水底・又空の上まで放浪するという物語だが、Cynthia は理想美の象徴として Shelley の *Alastor; or the Spirit of Solitude* に極めて類似している。⁹⁾ Alastor の場合は、主人公の自己中心的な態度のために破滅してしまうのだが、Endymion は

enthralments far more self-destroying (Book I. l. 798)

に身を抵し同胞の苦しみを自己の苦しみとすることで理想美の象徴 Cynthia と地上の美しい Indian Maid が同一であることを見出す物語である。Book I から IV までの各 episode は他の苦しみに対する Endymion の sympathy を契機として結びついているだけであり、当然構成の緊密さと必然性は希薄である。

Book III の Glaucus と Circe の episode は他の episode と比べて単に Endymion の同情というだけでなく Glaucus と Scylla の救済に直接力をかすのでありその結果 Glaucus は千年の長い苦しみから救われ Scylla は再び生命を得るのであるから、全体の中でも重要な位置を¹⁰⁾占める。

Glaucus は Scylla への愛が報いられないため、魔女の Circe に近づく。彼は Circe の魔力で swoon の状態に入るがそのとき立琴やバラの香りがただよい Circe が Glaucus につくり出す状況は *La Belle Dame Sans Merci* における仙女姫と同じである。

With tears, and smiles, and honey-words she wove
A net whose thralldom was more bliss than all
The range of flower'd Elysium. (ll;426-8)

Glaucus には long love dream (l.440) が続くがある朝突然に激しい喉のかわきで目をさます。側には寝ているはずの Circe もおらず求める水もない。

Whereat the barbed shafts
Of dissatisfaction stuck in me so sore,
That out I ran and search'd the forest o'er (ll.480-3)

このとき Glaucus が感じたのは、「さかとげ」のついた矢で刺されたような苦しみである。探しに出た森の中で彼は Circe によって姿をみにくく変えられた多くの男たちを見彼も醜い老人にされ更に愛する Scylla の生命も奪われたことを知る。Glaucus は Endymion にその苦しみを

O Dis, even now
A clammy dew is beading on my brow
At mere remembering her pale laugh and curse. (ll.568-70)

と訴えるが、これは *La Belle Dame Sans Merci* の悪夢から覚め、やつれ果てて丘辺をさまよう騎士の姿 (I see a lily on thy brow, / With anguish moist and fever dew) とびったり重なり合っている。

Book I の *Endymion* の夢も同様である。さまざまな花が咲き香る丘辺で彼を眠りにさそうのは、夕べの風が運ぶ poppy の香りである。彼は *Cynthia* との陶酔的な夢を見る。がこの夢も「火花がダイヤモンドに一時反射して輝きはしても、又すぐに消えてしまうように。」(ll.675-8) 消え去る。その後が続くのは荒涼たる風景である。この episode は最後の Book IV において、地上のインドの少女と *Cynthia* が同一であることで完結し、最終的に夢と現実は一一致せられる。Book III の、前に述べた *Glaucus* と *Scylla* も *Endymion* の助けにより結局幸福になるというのであるから、*La Belle Dame Sans Merci* の場合よりは optimistic に描かれているとは言えよう。

次に *The Eve of St. Agnes* でも互いに愛し合う *Porphyro* と *Madeline* が、生命の危険を冒しながら首尾よく *Madeline* の屋敷から逃げ出す物語である。この story は *Porphyro* と *Madeline* の情熱的な愛と彼らの両家の宿根という Shakespeare の *Romeo and Juliet* 的モチーフを持っていることは明らかである。しかしこの詩の特徴は、結末が *Romeo and Juliet* とは反対に幸運でありながら、背景には衰退と死のイメージが彩られていることであろう。*Romeo and Juliet* では最後の二人の純金の像が彼らの情熱の象徴となり得ている一方、Keats のこの詩では、このような象徴を最初から拒否した姿勢で描かれているのである。物語の構成は *Porphyro* と *Madeline* の両家の解きがたい憎しみと彼らの愛の葛藤として展開するのではなく、Keats が言っているように、衰退と死の「織物」に二人の「人物と情緒が極彩色の模様として鏤められている。」といえよう。第一連の凍るような寒さのなかでひとり祈りを捧げる beadsman は、物語の plot には直接関係を持たぬままに、最終連に老女 *Angela* と再びあらわれ、醜い姿で死んでゆく。これらを背景として、聖アグネス祭の前夜に行われる恋人の儀式がこの詩の climax をなしている。

この climax のなかに夢のパターンが描きだされている。

聖アグネス祭の前夜には、未来の夫を夢見ることができるという伝説を信じて、*Madeline* はベッドにつくと、目ざめているような半ば眠ったような状態 (wakeful swoon) から次第に至福の夢 (blissful dream) に入り、その夢の中で愛する *Porphyro* の姿を見るのである。一方その夜、*Angela* の手引きで危険を冒して屋敷にしのび込んだ *Porphyro* は *Madeline* の眠っている部屋に入るとテーブルの上に珍貴な種々の菓子類をつみあげ、その芳香は部屋を一ぱいに満す。それから彼は *Madeline* のベッドの傍で *La Belle Dame Sans Mercy* という古いプロバンスの歌を、リュートで奏でるのである。そのとき目をさました *Madeline* は、会えるとは思ってもしなかった *Porphyro* をそこに見つければ、この上ない喜びであるはずだが、奇妙なことにそれは彼女の見た夢とくらべ

There was a painful change, that night expell'd
The blisses of her dream so pure and deep. (ll. 300-1)

Porphyro の出現は、彼女の至福の夢の境地を奪うものとして、背ざめ冷たく恐ろしい様子として *Madeline* の目に映るのである。Keats の Imagination はいかなる現実とでも接触すればたちどころに醜い姿に変形され、その夢は消え去るのである。この後 *Porphyro*

と Madeline は、ひそかに屋敷を抜け出し、厳しい寒さと吹きすさぶ嵐の中に出て行く。その夜お祭り騒ぎをした Baron や多教の客たちが悪夢に悩まされるが、Porphyro と Madeline が出て行くのは嵐の中だとすると、甘美な夢の世界から嵐と Nightmare の世界へ出て行くだけである。

次いで *Lamia* の場合ヒロインは名前が示すように Circe 或は仙女姫と同様の、他を破滅させる性格を帯びている。Wasserman は *Lamia* を Lycius にとっての “a vision of ideal beauty” であると解釈しているが、これに対し Pettet は Wasserman が *Lamia* のなかに潜む破壊的な本質と彼女の愛の欺瞞性を見落していると指摘している。*Lamia* の Part II ll. 11-15 で *Lamia* と Lycius の愛に嫉妬した愛の神が、夜ごと彼らの部屋を飛び廻るとき、禿鷹の如き姿として形象化されているが、これは *Lamia* の性格を暗示していると解釈できる。しかし *Lamia* が Lycius の死の直接の原因であるとは言えないのであるから少くとも Lycius にとっては “a vision of ideal beauty” といえるかもしれない。ここではたしかに、仙女姫と騎士、或は Circe と Glaucus との関係とは異った関係が、Apollonius が加わることによって生じているのである。

Lamia では「夢」と覚醒の状況は、Part II の初めの部分にあらわれる。

For all this came a ruin ; side by side
 They were enthroned, in the even tide
 Upon a couch, near to a curtaining
 Whose airy texture, from a golden string,
 Floated into the room, and let appear
 Unveil'd the summer heaven, blue and clear,
 Betwixt two marble shafts—there they reposed,
 Where use had made it sweet, with eyelids closed,
 Saving a tythe which love still open kept,
 That they might see each other while they almost slept;
 When from the slope side of a suburb hill,
 Deafening the swallow's twitter, came a thrill
 Of trumpets—Lycius started—the sounds fled,
 But left a thought a-buzzing in his head.
 For the first time, since first he harbour'd in
 That purple-lined palace of sweet sin,
 His spirit pass'd beyond its golden bourn
 Into the noisy world almost forsworn. (ll.16-33)

Lycius と *Lamia* は彼女の魔法の館 (That purple-lined palace of sweet sin) の中で愛の生活を続けているが、或る夕方までろんで二人にはるか彼方の丘からつばめのさえずりをかき消して突然 trumpet の響きが聞えて来る。その響きはすぐ消えるが Lycius の頭のなかに重苦しい跡を刻み込んでしまう。殆んど忘れていた現実の喧噪の世界へ意識が呼びもどされてしまったのである。

Lycius は結局いやがる *Lamia* に、無理に彼らの結婚披露宴を開くことを承諾させる

のだがその結果招かざる客 Apollonius が披露宴に出席し、その席で Lamia が蛇の化身であることを見破ったために Lycius は破滅する。彼の死の直接の原因は Apollonius にあると言えるのだが Lycius が館で、一度地上的な現実の世界を意識したとき、彼は Lamia との生活を続け同じ状態を保つことができなくなってしまうのである。このとき破滅がすでに予定されている。哲学者 Apollonius は Lycius の破滅を完成させるにすぎず Lycius が Lamia との夢から一たん覚醒すれば再び夢の中にはもどれずに、すでにそのとき彼らの世界は崩壊している。この詩の Part I で Keats は Hermes と nymph の永遠に続く愛を描いているが Lycius と Lamia の愛はそれと対比されつつ、喉の渇きや朝の目ざめ同様、生理的必然でもあるかのように破壊されるのである。

Endymion が、書かれてから間もなく作られた *Isabella, or the Pot of Basil* は Boccaccio からの verse adaptation であり、殆んど plot を変えずにそのまま用いられている。だから *Isabella* が物語として成切しているか否かは W. J. Bate が言うように Keats より Boccaccio に帰せられるべきかもしれない。他の物語詩の場合には、例えば *Lamia* ではもともになった Burton の *Anatomy of Melancholy* には、Lycius の死までは蝕れておらず、又 Glaucus の episode でも、Ovid の内容は自由に変えられている。又 Keats がこの物語を選んだ理由も、Italian Romance の復活の風潮が当時一般に見られ、Keats も最初は友人 Reynolds と二人で、Boccaccio からの verse adaptation を出版する目的でこの詩を書き始めている。この詩が1820年に *Lamia* や *The Eve of St. Agnes* などといっしょに出版された時、Lamb はこの詩を “the finest thing in the volume” と賞讃し、*Lamia* の fancy よりも *Isabella* の feeling を高く評価したのもこのような時代風潮と無関係でなかったのである。しかし Keats が Boccaccio から詩に直す際、注意しなければならないのは、第一に中世 Romance の伝統に従い Chaucer にならって Muse 或は Melancholy に対する祈願を物語の途中に挿入し、筋を中断させており、又同じ手法で商人たちの冷酷さと強欲さを、*Isabella* の兄弟に向けて激しく批判していることである。第二として *Isabella* と Lorenzo の愛情が Boccaccio では非常に軽く物語が発展する条件としてだけ扱かれているのに対し、Keats は彼らの愛情を passion として特に強調していることである。この詩の愛の描写は、*Endymion* と極めて類似しており、なかでも Book I の *Endymion* と Cynthia の夢の中における陶醉状態と Lorenzo と *Isabella* の求愛、又それに続く場面は、同一のパターンに属している。だが特に *Isabella* が Lorenzo の亡霊を夢に見て殺されたことを知る場面には、他の物語詩に見られるあの「夢」の状態が、強くあらわれている。

And she had died in drowsy ignorance,
 But for a thing more deadly dark than all;
 It came like a fierce potion, drunk by chance,
 Which saves a sick man from the feather'd pall
 For some gasping moments; like a lance
 Waking an Indian from his cloudy hall
 With cruel pierce, and bringing him again
 Sense of the gnawing fire at heart and brain. (stanga 34)

これは Lorenzo の亡霊が森の泥にまみれた恐ろしい姿で Isabella のベッドの傍に立って、自分が彼女の兄弟にその私欲のために殺害されたことを夢の中で Isabella に告げる場面だが、この Isabella の夢は、「ひん死の病人の生命をわずか教分間だけながらえさせる恐ろしい薬」であり、「阿片くつに眠るインド人を残酷につき刺して目覚めさせ、心の中に再び火のような苦しみを与える槍」のイメージとして与えられる。われわれはここで Isabella の心に火のような苦しみを与える槍のイメージは Glaucus に絶望の激しい痛みを与える「さかとかげのある矢」(barbed shafts) と同じイメージであることを憶い出すのである。

(IV)

これまで分折してきた陶酔的な夢と自己意識の忘却状態、それに続く覚醒のパターンは Keats の物語詩に繰り返しあらわれるだけでなく、他の作品 *Ode to Nightingale* などにも見られる。これは詩人が Imagination によって理想的な世界を築こうとするとき、現実の物質的な世界と軋触して必然的に引き起される、ある緊張した対立関係と対応し合っている。

ロマン派の詩人たちは、あらゆる束縛から自我の自由な解放をめざし個性的、独創性に徹しようとした。そしてその表現を詩における Imagination に託したのである。Keats は Wordsworth を egotistical sublime (L.p.226) の詩人と呼んだが、この言葉は Wordsworth のみでなく、全ての彼の時代の詩人たちを支えていた精神であった。しかし他方では De Quincey に見られるように、阿片による “trance” や “reverie” が人間の至上の状態であるという精神をもまた生みだしているのである。これは egotistical sublime の詩人 Wordsworth にも同様に見いだせるものである。

that blessed mood,
In which the burthen of the mystery,
In which the heavy and the weary weight
Of all this unintelligible world,
Is lightened:—that serene and blessed mood,
In which the affections gently lead us on, —
Until, the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul: (Tintern Abbey, ll,37—46)

Keats はすでに見て来たように、このような意識の強い詩人であり、それを詩の創造の核心としていたともいえる程だが、反対にこの精神状態にふけることは真の詩人として危険だという意識も又同時に強く持っていた。 *Lines written in the Highlands after a Visit to Burns's Country* という詩で

O horrible! to lose the sight of well remember'd face
Of Brother's eyes, of Sister's brow—constant to every place. (ll.33—4)

とうたい、又

No, no, that horror can not be, for at the cable's length
Man feels the gentle anchor pull and gladdens in its strength:— (ll.39—40)

といって、このような意識の状態になることは“half-idiot” (l.41) であるとさえ呼んでいる。これは彼の書簡にもしばしば見られ前に引用した書簡の一節

Wonders are no wonders to me, I am more at home amongst Men and Women.
(L.p.439)

という意識が

with a great poet the sense of beauty overcomes every other consideration, or rather obliterates all consideration. (L.p.71)

或いは

This mighty abstract Idea I have of Beauty in all things stifles the mere divided and minute domestic happiness... (L. p.299)

などという意識と対峙していることを示している。

Keats を抽象的な美の世界だけに留まらせ得ず、現実の人間の悲惨さに向わせたものは、家族、兄弟間の不幸、彼個人の恋愛の問題、或はさしせまる経済的困難などが第一に考えられる。劇作に心を引かれたのも、そこには経済的希望も一しよに託されていたのである。Gittings は *The Keats Inheritance* において、Keats の祖父 G. Jennings の遺産をめぐる彼の家族の間に訴訟が起ったことを裁判記録をもとにして論じているが、この裁判はこれまでの伝記に述べられたような「友好的」的なものではないと言って「Keats 家をめぐる遺産の物語は、ある点で中産階級^⑥の家庭に起ったギリシヤ悲劇」のようであったと結論している。

だが第二に、このような Keats 個人の問題或いは Keats 家一族の問題をも含めて、産業革命以後の激動する社会の時代精神が Keats を深くとらえていたことを重視しなければならぬであろう。「急進派或いはジャコビン臭いとにらまれただけで、国家、階級、宗教、職業、それら全ての敵であるという焼却を作家の額に押しとまで考えられた時代」と John Wain は言うが、Keats の作品に対する批難攻撃も、このような時代の Godwin や Shelley, Hunt らに対する政治的傾向への反動として熾烈なものであったのである。Keats が「私の貴族的気質にもかかわらず、私は最近の社会の進展には喜びを感じないわけにはゆかない。私は死ぬ前に是非、自由陣堂 (Liberal Side of a Question) に少しでも手助けをしたいと思う。」(L. p.394) と書き社会にはよりよき善への断えまない発展があるのだと信ずるとき (See, L. p.406) Godwin や Shelly と思想的に結びついてい

ることは明らかである。しかし当時の社会の「進歩、進展」と呼ばれるものは、決して古きよき時代への回帰ではなく、全ての牧歌的關係の残滓すらを、現金取引きの関係に変えてしまうという方向に進んでいたのである。Endymion Book III の冒頭や *Isabella* において Keats が痛烈に批難しているのは、新たな支配的現実が、Lorenzo と *Isabella* を Circe の魔術にかわる別の力で、破滅させてしまうことを認識していたからである。B. Shaw は *Isabella* のこの stanza を賞讃し、もし Keats が生き永らえたら血気盛んな革命家になったであろうと言っている程だが、既成の社会や伝統にも、又新しい社会秩序にも反抗する Keats の両面批判の精神は、彼を Shelley の如き革命的な詩人としてではなく the giant agony of the world のなかに留まることが最も価値あることであるという哲学へ導いてゆく。

彼の物語詩にあらわれる「夢」の状況は、彼のこのような批判精神による現実意識と、彼の Imagination が衝突し合うとき二つに分裂する詩的衝動をも暗示しているのであろう。

Hyperion は未完の作品であるが、このなかでは、没落した Titan たちに代って新たに力を獲得する Apollo の夢が描かれている。

Apollo が現われるのは Book III になってからだが、(Book III の途中で中断されている。) Apollo が悲しみに沈んでいると、そこへ Mnemosyne があらわれる。Apollo は彼女の夢を見たと言げると Mnemosyne は次のように Apollo に語る。

Thou hast dream'd of me: and waking up
Didst find a lyre all golden by thy side,
Whose strings touch'd by thy fingers, all the vast
Unwearied ear of the whole universe
Listen'd in pain and pleasure at the birth
Of such new tuneful wonder. (ll.62—7)

Apollo が Mnemosyne の夢を見て目覚めるや、側に黄金の堅琴を見だし自分に宇宙を支配する新しい力がそなわったことを初めて認識する。Apollo の夢は Book II での Oceanus の言葉

tis the eternal law
That first in beauty should be first in might. (Book II. ll.228—9)

を裏付けるものであり、一番美しいものこそ宇宙の支配者であるべきだという Keats の希望の表現でもある。生れ変わった Apollo が奏でる「新しい調べよき驚異の音楽」に全世界は飽くことなく耳を傾けるのである。

Hyperion の場合は、*Endymion* を除けば他の物語詩の夢のテーマと異って極めて optimistic であり、Apollo の夢からの覚醒は美と知性の勝利の意識と結びついていることに注意したい。

だが Keats はその後を続行することができず、中断したのち再び *The Fall of Hyperion, A Dream* として改作を試みるが、これも未完のままで終わっている。Apollo の夢も他の作品の夢と同じく、Mnemosyne の力をかりて啓示された瞬間に、すでに消えさってしまっている^⑧のである。

Notes

- ① Pettet, *On the Poetry of J. Keats* (Cambridge. 1957) p.287,
- ② *The Letters of J. Keats* ed. M. B. Forman 4th ed. (Oxford,1952) p.439—hereafter cited as (L. page)
- ③ W.P.Ker, *Form and Style in Poetry* ed. R. W. Chambers. (Macmillan. 1929) p.282—3.
- ④ M. Allot, *Isabella, the Eve of St. Agnes and Lamia in Reassessment* ed. K. Muir (Liverpool U. P. 1958) p.45.
- ⑤ *Sleep and Poetry* II.111—2, 124—5 (*The Poems of Keats* ed. de Selincourt. London,1954.)
- ⑥ See, Allot, p.45.
- ⑦ Thorpe, *the Mind of J. Keats* (Russell & R, 1964) p.104.
- ⑧ Wasserman, *the Finer Tone*. (London, 1953) p.73—101.
- ⑨ Bradley, *The Letters of Keats* in *Oxford Lectures on Poetry* p. 240—4.
See, Pettet, pp. 140—1
- ⑩ See, Pettet, pp.179—85
- ⑪ Wasserman, p.167.
- ⑫ Pettet, pp.230—1.
- ⑬ W. J. Bate, *John Keats* (Cambridge Mass. 1963) p.310.
- ⑭ quoted in Bate op. cit. p. 314.
- ⑮ See, Pettet, pp.284—6.
- ⑯ Gittings, *The Keats Inheritance* (London, 1964) p.55.
- ⑰ J. Wain, *Contemporary Review of Romantic Poetry*, quoted in *Wordsworth* by Kano (Tokyo. 1961) pp.160—1.
- ⑱ quoted in *Keats Interest in Politics and World Affairs* by Thorpe (PMLA 46, 1931.)
- ⑲ See, Bostetter, *The Romantic Ventriloquists* (Washington U. P. 1963) p.136